

49%, PAP では 57%, 91%, 51% で, Sensitivity では γ Sm が最も優れるが, Specificity は PAP が勝り, Efficiency は PA が優れていた。

17. 前立腺癌の経過観察における骨スキャンと PAP 測定の価値

相澤 卓 松本 哲夫 間宮 良美
三木 誠 (東京医大・泌)

抗男性ホルモン療法を中心として治療した過去5年間の前立腺癌 87例のうち, 骨シンチグラフィを2回以上実施し, かつ PAP・RIA でも経過を追跡できたのは 30 症例である。

これらの例で一定期間の前後で骨シンチを対比できる単位(2回実施は1単位, 3回実施は2単位とし)について, 骨シンチと PAP 値を対比検討した。

PAP の変動と骨シンチの変化が一致したのは, 50 単位中 27 単位 54% であった。しかし, PAP の変動が 1 ~ 2か月で 10 ng/ml 以上あったものに限ると, 骨シンチの変化との一致率は 70.6% で認められた。特に短期間に 10 ng/ml 以上 PAP 値が上昇した場合はすべて骨シンチも悪化していた。いわゆる flare phenomenon はわずか 3.3% でみられたのみであった。

前立腺癌の経過観察に当っては, PAP などの腫瘍マーカーを 1 ~ 2か月ごとに検査し, それが急上昇した時または強い臨床症状が出たときのみシンチグラフィを実施すればよい。

18. 骨シンチグラフィーにおける肋骨の早期骨転移所見の検討

蓑島 聰 岡田 淳一 有水 昇
(千葉大・放)

19. 髄芽細胞腫患者における骨シンチグラフィ

小須田 茂 鎌田 憲子 鈴木 謙三
(都立駒込病院・放)

Medulloblastoma は小児小脳虫部に好発する未分化腫瘍であるが, 骨転移例に遭遇することはまれである。最近, 3 例の Medulloblastoma 患者に骨シンチを施行し, 2 例に異常集積を認めた。1 例はいわゆる super bone

scan を示し, レントゲン写真上, びまん性の造骨性変化を認めた。

Medulloblastoma に対する各種治療法の進歩により, 患者の生存率は向上している。長期生存例に頭蓋外転移の生じる危険性が高いとすると, 骨転移が最も高頻度であり, 患者の経過観察に骨シンチは有用と考えられた。

20. MFH に対する ^{67}Ga シンチグラフィの有用性について

太田 洋 尾崎 裕 雨宮 謙
竹内 信良 白形 彰宏 玉本 文彦
住 幸治 片山 仁

(順天堂浦安病院・放)

malignant fibrous histiocytoma (以下 MFH) は, 中高年の四肢および後腹膜に好発する軟部組織由来の悪性腫瘍である。今回, 手術および培養で病理学的に MFH と診断された 5 例について, ^{67}Ga シンチグラフィの有用性を各種画像診断と比較検討した。MFH は, その病理組織像の多彩さを反映して, 画像診断の所見も多彩で決め手となる所見に乏しかった。その中で, ^{67}Ga シンチグラフィは, これのみで質的診断は困難なもの 4 例中 3 例で集積しており, 特に病巣の広がりや治療後の経過観察に有用であると思われた。

21. 仙骨 chordoma 3 症例の骨シンチ・Ga シンチ

小野 慶 (神奈川県立がんセ・核)
橋田 和義 (同・整外)
猪狩 秀則 (横浜市大・放)

chordoma は胎生期の脊索の遺残から発生する悪性の骨腫瘍であるが, 発症頻度の低いことも関係して, 核医学的所見の報告は少ない。最近 3 年間に 3 例の chordoma を経験したので骨シンチ, Ga シンチを中心に報告した。

全例男性, 年齢は 54 歳, 63 歳, 86 歳。初診時の腫瘍の大きさはおのおの 17 × 15 × 14, 7 × 7 × 5, 15 × 15 × 13 cm を示した。骨シンチでは腫瘍自体への集積は乏しく 63 歳例では正常骨より低く, いわゆる cold を呈していた。Ga シンチでは腫瘍の集積性は低く 86 歳例では cold を示した。骨盤内に腫瘍は発育するため腸管内 Ga の残存は増加し, 圧迫, 偏位の同定が必要となった。骨シン

チ・Ga シンチとともに腫瘍集積性の低い原発性骨腫瘍であると判断された。

22. DPA 法による骨塩定量—SPA との相関について—

後藤 英介 森 豊 川上 憲司
(慈恵医大・放)

従来、DPA 法、SPA 法、インピーダンス法により骨塩定量および身体構成成分の計測が行われている。今回これらの測定法について検討を加えたので報告する。

1) 焼却骨を用い DPA 法の骨塩定量の精度をしらべた。2) SPA 法(焼骨)による骨塩が DPA 法において身体のどの部分の骨塩を反映しているか検討した。3) FAT Mass, Lean Mass および %FAT の精度について、DPA 法とインピーダンス法で対比した。

焼却骨の実測値と DPA 法による骨塩量は高い相関を示し、DPA 法の精度が高いことが確認された。SPA 法(焼骨)で求められた骨塩は DPA 法による skull の骨塩量と相関が高かった。DPA 法で求めた FAT Mass, Lean Mass および %FAT はインピーダンス値と高い相関があり、DPA 法の精度が確認された。